

B. 総合学習の研究

石川 久美 石橋 尚美 川合 勇治 高木 徹 高須 明
田中 裕巳 徳井 輝雄 長谷川 弘 三橋 一夫

総合学習の理論と実践 ——新たな飛躍を目ざして——(その5)

1. 3年間の実践の総括と課題

徳井 輝雄

① はじめに

1986年4月より高校三年生(文系選択生)を対象にしてはじめた総合学習の授業は、1989年4月をもって丸三年を終了し、あらたに第4年目に入った。これを機会に、この三年間の実践を総括し、新しい展望をきりひらきたい。われわれの行った総合学習の授業は、次の点で通常の授業と異なる。

1. 教科の枠にとらわれない。
2. 生徒と教師、生徒同士の討論を中心とした授業をすすめる。
3. 教師集団がチームを作って授業を担当する。
4. 一年間を通じて、大テーマ(生命について)を意識した授業を展開する。
5. 掲げた教育目標は、「生命を大切に育てる」というように、およそ受験準備とは縁の薄いものであるが、高校生活の三年間で、生徒が学んだことを使って、テーマに即して、まとまりのある思考をするという、常識のある市民の育成を狙った完成教育に力点を置いたものになっている。

このような特徴をもった授業が、この三年間(1986年4月～1989年4月)にどのように展開され、生徒はどう反応し、今後にのこされた課題は何であるかについて報告する。

② 授業の展開

2-1) 第一学期(4月～7月)

大テーマ「生命について」の下に、小テーマを設け、その小テーマに従って教師集団が順次問題提起を行う

ていく。この三年間にとりあげたテーマを注①に示しておく。

この段階で特筆すべき事柄は、授業をはじめにあって、授業計画を生徒と共に立案するということである。この生徒と共に授業計画を作るという営みは注①の③にも示しているような、過去に総合学習で学んだ生徒の反省の言葉を生かす形で1988年度に行われた。(詳しい生徒の反応は注②文献を参照)1988年度の生徒の意欲のすばしさがこの年度での実行を容易にしてくれた。1988年度当初に、生徒にたいして、総合学習の授業が過去にどのような形で行われたかを説明し、総合学習の目的・授業内容・授業形態の特徴を明らかにしたうえで、生徒との討論を重ね授業計画を作り上げた。

この、授業計画を生徒と共に作るという営みは、その後の授業に対する生徒の取り組みを非常に意欲的なものにした。とくに次に示す如く、それまでは教師が行っていた問題提起者の役割の一部を生徒がかって出るといった画期的状況が生まれた。

生徒と共に作りあげた1988年度の第一学期の授業計画は次のようなものであった。番号は順序を示しておりそのうち4は生徒が問題提起者になった。

1. VTRで「チェルノブイリクライシス」をみる。
2. 核エネルギーの利用と生命というテーマで話し合う。
3. 戦争と生命というテーマで話し合う。
4. 心の悩みについて生徒二人から問題提起をうけそれをもとに話し合う。
5. 麻薬・たばこ・シンナーについて話し合う。
6. 愛と性というテーマで話し合う。

7. 差別について話し合う。
8. 食糧・人口論について話し合う。
9. 「生きているとは」というテーマについて話し合い一学期のまとめとする。

これらは1を除いてはすべて二時間をかけて討論することにした。これは精選されたテーマについてじっくりと話し合った方が良いという先輩生徒の反省の言葉をとり入れた結果である。

2-2) 第二学期前半(9月~10月半ば)

第二学期の前半の授業は、各生徒が決めたテーマについて調査・研究・を自学自習の形で行う、生徒が選んだテーマを注①の②に示して置く。

生徒が自から選んだテーマにもとずいて自学自習に入るが、場所は主に図書館である。VTRをみたり、本をみたり、なかには、同級生達を対象にテーマに関連した意識調査をしたり、同じキャンパス内にある大学の教官を訪ねたり、名古屋市内・施設を訪れたりして研究をすすめていく。参考資料は、教師団が分担して生徒に示してやる。二時間毎に生徒からの質問事項にもとづき、意見の交換を報告書(スタディレポート)などを介して行う。このスタディレポートには、
1. 今週調べようとしていること。
2. 今週どういうことが分かったか。
3. これからどういうことを調べたいか。疑問に思っていることは何か。
4. どういう形で発表をするか。などの記入事項がある。(注③の文献を参照)

テーマ毎に担当教師を決め相談をうける体制をとっておく。授業中に対応するのは平均二人の教師であるが、総合学習グループの教師(7人~8人)が分担して常時相談をうける。

2-3) 第二学期後半(10月~12月)

この時期は、調査研究した結果を発表する。発表をうけて討論を展開するが、これらの司会は生徒が順番制で行う。この順次交替して司会を務めるという方式は、生徒の授業への参加態度の向上に非常に役立つ。50分授業のうち25~30分位を発表に使い残りは討論に使う。例年、最初のうちは絞切型の討論しかできないが、回を重ねるうちに、発表者、司会、聴き手共に上手になっていく。とくに1988年度は、格別に上手になっていった。司会者が発表者の発表内容から討論の課題にふさわしい部分をとりだしそれをさらに深めるように心掛けていった。教師は討論のすすめ方についての助言や求められれば、最後のしめくりや感想を述べるのみで、あまり発言を多くしないように努力している。これは、例年生徒から教師のしゃべりすぎが指摘されるからである。生徒達は、他人の発表の仕方、司会の仕方から教訓を学びとり、自からの力で討論の仕方を学びとったいった。

2-4) 第三学期(1月)

高校普通科の三年生は、大学受験等の関係で、第三学期は授業をする時間が実質的にあまりない。したがって第二学期の補充と反省会で終わってしまう。例年まとめのレポートを提出させているが、大学受験を間近に控えて、内容をさらに充実させて提出する者は少なく、第二学期の発表内容をそのままレポートにする者が殆んどである。

反省会では貴重な意見が出される(②の文献参照)それが次年度の授業改革のバネになっており発展のきっかけともなっている。1986~1988年での反省会で出されたもののうちユニークなものを注①の③にまとめておく。

2-5) 評価の方法

新しい内容や形態を目指す、この総合学習の残された課題の一つは、学習結果をどう評価するかという事である。現在は暗中模索といってよい。

記述式問題を中心にした定期試験の結果と日頃の授業の態度及び自学自習の結果をまとめたレポート等を中心に評価している。このうち定期試験にどのような問題を出しているかについて既に報告した。(注②及び③の文献参照)日頃の授業態度とは、討論への参加の程度、自己の見解の発表の仕方、司会の仕方、などをみている。またレポートに対する評価は、調査・研究の方法、テーマに対する自己の見解の確かさと独自性などを対象としている。いずれもこれらは数量化がむずかしく、複数の教師の協議できめられる。

本校の評価の基準は内規で平均値がきめられている。したがって、今までのこの授業での評価のつけ方は、平均値に近い値を全員につけていく傾向になってしまう。教育上の評価とは、生徒間で差のある評価をつけることが、目的ではないのでこれでも良いと考えている。

①で述べた如く、この授業の目標は、最終的には、「生命を大切に生徒を育てる」ことにあるので、これに少しでも近づいていったかどうかが評価の基準になるべきであるが、この判定は困難である。そのため、今のところは前述のような観点から評価が行われている。

③ 今後の課題と展望

3-1) 生徒相互間での学びあいを強める

'88年度の反省会での生徒の発言に次のようなものがあった。

- 他の人はなかなかやるなあと思った。
- 他の人もいろいろ考えているんだなあと思った
- 他の人にいろいろ教えてもらえる。この授業を受けていない他の授業をうけている生徒にもいろいろ考えている人がいるはずだから、そういう人に

もこの授業に来てもらってもよいではないか。他にも教えられる生徒はいるはずだ。

このような発言が出てくるのは、この授業の特徴である。生徒同士の討論を中心とした授業を展開したからである。討論を重視した授業は、生徒間の学びあいを重視した授業となるのである。これをさらに強めるには、小テーマにもとずいて問題を提起していく第一学期においても、もっと多くの生徒を問題提起者に登用してもよい。'86年度と'87年度では、生徒の問題提起者はなく、もっぱら教師団が入れ替わり立ち替わり教科の枠にとらわれないという見地から問題提起を行った。しかし、教科の壁を自からしらずしらすのうちに作ってしまい、そこから歩み出る勇気がない。その点生徒ならば、もっと大胆に歩み出すに違いない。'88年度は前述の如く、二人の生徒が自らの体験をもとに迫力のある問題提起を（差別の問題とくに精神病患者への差別と障害者への差別の問題を“心の悩み”というテーマで）行った。'89年度以前は、問題意識のある生徒が居れば、二人でも三人でもいや受講者全員でもよい、もっと登場させて生徒の相互学習の場を広げていきたい。（注⑥参照）

3-2) 他の授業との相互乗り入れ

前述の生徒の発言を紹介した部分にもあるような、他の授業との相互乗り入れを、以前からわれわれは考えていた。しかし、'88年度までにその実現はできなかった。相互乗り入れには二つの方法が考えられる。一つは教師の相互乗り入れである。これをわれわれは考えていた。即ち、総合学習を担当している教師が、たとえば生物の授業を担当している教師と入れ替わってそれぞれ相手の授業を担当するのである。一学期に一回か二回位を考えていた。今一つは、二つの授業の生徒同士の交流である。総合学習の授業に、たとえば倫理の授業をうけている生徒も参加してもらい、生命倫理について意見を交換するのである。この方式を'88年度の反省会で或る生徒が提案した。この生徒は「生物の授業との合体を楽しみにしていたが、実現されず残念であった。他の授業の生徒と合体すれば、討論のメンバーが固定されずユニークな考えをもっときけたはず」と述べている。

この総合学習研究グループのメンバーのうち、高校三年の授業を担当している者、とりわけ、総合学習と同時展開している授業を担当している者の授業との相互乗り入れはすぐにできるはずである。まずはこれからはじめていきたい。

これらの相互乗り入れによって得られるものは、学習に対する生徒達の強い好奇心と意欲であろう。また教師にとっても、日頃の授業の内容や方法に対する再検討のきっかけになるであろう。

3-3) 学習結果発表形式の多様化

前述のように毎年二学期後半には、自学自習によって調査・研究した結果を順次発表していく。この発表の形式は、発表者が資料や発表要旨をまとめた印刷物を配布し、それをもとに報告していくといったものにほぼかたまりつつある。しかしわれわれは、総合学習の授業をはじめた'86年度からいつもこの発表形式を多様化したいと考えていた。詩の形式でもよい、マンガやイラストでもよい、寸劇や紙芝居にしてくれてもよいと。

'89年度の聴講生達は、二年生の時、社会科世界史の授業でまんがや紙芝居による研究発表を経験している。それを三年生でさらに継承することによって三年来の懸案であった、調査・研究した結果の発表形式の多様化を是非実現したい。

従来からの形式は、文章にまとめる事が不得手な生徒や、考えていることを口頭で発表することが不得手な生徒にはむいていない。'88年度の生徒の中には、文章は上手に書くが、しゃべらせるとまとまりがなくなる生徒、しゃべるのは上手だが、文章表現ではまとまりがない生徒、文章・口頭発表ともに手がだがイラストを使ってうまく説明する者などがいた。'89年度の生徒の中には、総合学習の授業をこれから受けるにあたって、「考えを文章にまとめるのは手がだ」「しゃべるのは手がだ」と前途に不安をもつ者がいる。したがって自分にあった表現形式を考えそれに従って発表するようにより強く指導していきたい。

この総合学習の授業は、'88年度を除いて、いはゆる問題を抱える生徒を比較的多くかかえておりながら、今までの三年間はうまく展開できた。その要因は二つある。

一つは□で挙げた、総合学習のもつ5つの特徴である。今一つは、小人数で授業が行えたことである。これは一番目の特徴をも支えているといえる。既に注②で示している文献で報告した如く、この総合学習の授業は、'86年度13名、'87年度12名、'88年度12名で開講を許されてきた。'89年度は既に17名で行っている。この人数の生徒を常時二名の教師で指導に当たってきた。小人数の生徒を相手に授業を展開することのもつ利点の第一は、授業中に必ず全員が発言できるという事である。このことによって、授業への参加意識が生じ、参加している実感が湧きそこに満足感を覚える。'88年度の生徒達はとくに熱心であったが、この小人数学習からくる授業への参加意識の喚起の効果もあり、必修科目でもなく、ましてや大学入試に直接関係なく、どちらかといえば当面の入試にとってはお荷物のはずの総合学習の授業に風邪をおしてまで参加する生徒が現れた。

小人数授業の教師にとってこの利点は、生徒一人一人に目が届くという点である。一人一人に発言する機会を与えて授業に直接参加させることにより、生徒を正しく評価する機会を多くもつことができる。生徒各人との討論も可能になる。このことはゆるい形での口頭試問試験を毎時間しているようなものである。

今後、この好条件が続くか否かは保障されていないが、条件が許される限り、小人数授業という条件を生かすことはこの外にもないかと考えていかねばならない。今考えられるものとしては、校外に連れ出して見聞を広める校外学習の形態の検討などがある。

3-5) ティームティーチングの積極的活用

総合学習研究グループに入っている教師は'89年度現在で7名である。'86年度から'88年度まではおよそこの程度の人数であったが、常時、授業を担当するのは二人であった。持ち時間数として二人が認知されているのは週に各一時間だけであるが、授業は週に二時間ある。したがって不足の一時間は、二人が「勝手に好きでやっている」という事になっている。それでも複数の教師のチームで授業を担当することは、総合学習の目玉である教科のワクを越える事を実現するには今のところ必須事項である。今のところというのは、一つは教科目として公式には、現代社会を行っていることになる為必ず社会科の教師が担当しなければいけないという校内での教員免許証及び学習指導要領のしぼりに対する認識があること。今一つは、一人の教師では総合的な学習を展開していく力量に不足があるということである。

今までにグループのメンバーが必ず一度は授業に直接参加するように努力してきたが、持ち時間や時間割り編成上の都合でそれさえ実現できない年もあった。

生徒は色々な教師の発言を望んでいる。'89年度の生徒の希望には、単に、総合学習研究グループに所属する生徒のみならず広く本校の教師集団の中から講師を選びたいという希望も出ている。特に生き方にかかわるテーマの時にはその傾向が強い。たとえば、たばこを何故吸うのかという問題を考える時、校内でのヘビースモーカーの教師の話を知りたいというように。

持ち時間や時間割編成の制約をうけつつ、幅広いチームを作って授業を展開するにはどうしたらよいかを今後とも考えなくてはならない。

3-6) 学校教育全体の総合化にむけて

現在の学校教育のかかえる問題は多くあるが、その中で特に高校普通科教育の抱える問題に絞れば、受験準備教育以外に何を教えるかが問われている。言い方をかえれば、高校教育独自の面としては何を狙うのかという問題である。高校教育の三年間を一つのまとまった教育期間としてとらえその中で完成させよう

とするものは、大学受験の準備以外には何があるのかという問題である。

諸般の社会情勢を考えるならば、平和教育、人権教育、環境教育、日本の主権者としての意識を育てる教育など、教育基本法を顕現化する教育がなされなければならない。これが総合学習が目されるゆえんである。即ち、学校教育を本来の姿に戻すための一つの手段として、学校教育全体を総合学習の立場から眺めなおし、総合化しなくてはならない。総合学習の立場については、今まで報告した小論で既に述べてきたところである。

すでにわれわれは、1979年から総合学習の研究をはじめているが、1982年から1983年にかけて中学三年生を対象とした総合学習「人間について考える」の初歩的実践を総括するなかで、学校教育全体の総合化に関連して次のように述べている。(注④の文献参照)たとえば教師にとって「何の為に物理を教えるのかといった教科の本質に戻って考える機会を与えてくれる。教科外教育を指導する一つの指針を与えてくれる。修学旅行や林間学校、文化祭を総合学習の場としてとらえてみようというように。」「学習課程を再検討し、三年間の学習をまとめ完成させるという意味をもつ総合テーマ、あるいは卒業試験としての総合的卒論の実施に向けて努力しなくてはならない。」たとえば、平和教育を実施しようとするならばそれを総合学習の見地に立つとどうなるのか、「日本が平和な将来をもつ為にどうすればよいか」というテーマで、三年間を学ぶ。その中には、教師集団のパネルディスカッションをとり入れたり、学外から講師(有名人や学者に限らず市井人でよい)を招いて話を聞いたり、映画や見学会を織り込んだりする。修学旅行でヒロシマに行くのは有力な行事となろう。文化祭など文化的行事で、平和と戦争をテーマに展示や演劇や合唱などを行う事も良い。このようにして卒業の時期をむかえたならば、三年間で学びとったものを一つの論文(作文)にして出してもらおう。」

そしてさらに1987年には高校三年での実践をふまえて、学校教育全体を総合教育の観点からみなおすことを提案している。(注③の文献参照)

本校では、昨年度(1988年度)行われた入試改革を受けて、その改革にみあった学校改革をしようとする気運が起こっている。その中で総合学習の立場から学校教育全体を見直そうとする動きがある。すなわち、たとえば平和教育を教育目標にかかげ、中・高あわせた6ヶ年間の教科指導や生活指導・学校行事を再検討し再編成しようという意見もあらわれている。本校の教育活動のうち、教科外活動だけを見ても、合唱コンクールではヒロシマをテーマにした曲を課題曲にした

り(高校)、演劇コンクールでは沖縄戦を主題にした劇を行ったり(中学)、修学旅行にはヒロシマ・大久野島へ行ったり、ナガサキへ行ったりしている(高校)。さらに5月の憲法記念日近辺では憲法講演会をもち、必修クラブでは平和探究クラブがある(いずれも中・高)。平和教育は、命を大切に教育でもあると広く受けとめるならば、中学校の道徳教育、保健の授業、理科の授業でも展開することは可能である。さらにこの総合学習の授業もその一つである。世界史や日本史の授業は平和教育の場であることは言うまでもない。このようにみれば、学校教育全体の中で平和教育を総合的に展開する下準備はできつつあると思われる。あとはそれを学校全体で系統的有機的に六ヶ年又は三ヶ年の課程としてまとめられれば良いだけである。そうすれば、学校全体の総合化は緒についたといえる。その為にこの総合学習研究グループは努力しなければならない。

4 おわりに

われわれ総合学習研究グループが展開した総合学習の授業は、現在の中等教育がもっている問題点のうち次の項目について解決の方向又は糸口を提供していることを述べまとめにしたい。

(1) 小人数教育をすることでどうなるかを示している。

現在、中等教育における落ちこぼしの問題、とくに中学校における生活指導の困難さからくる管理主義教育への傾斜は、一人の教師で多数の生徒を指導しなければならないところから来ている。即ち、一人の教師で多数の生徒を教えなければならない為に次のことが起る。

- イ. 多人数対象の一斉授業の形態を多用する。
- ロ. 画一化せざるを得ず生徒の多様な学習形態への要求に対応できない。
- ハ. 教師はしらすしらすのうちに、一斉、均一、を好み、多様化した個別への対応は好まなくなり、例外を認めず、説得ではなく命令やおどしを使って生徒を動かしたくなる。
- ニ. 講義調の授業が多くなり、実験・実習の授業を避けて通りたくなる。
- ホ. 授業において、生徒の発言の機会が少なく、参加感が薄く、授業への態度が受け身になりやすい。

小人数で授業が展開できた総合学習は上のいくつかのことが克服できた。

(2) 中学及び高校普通化の授業における一面的進学準備教育を防いでいる。

一面的な進学準備教育は、教科にとらわれ、受験のみの効率主義にとらわれ、点数主義になる。このよう

な教育を総合学習は、今まで述べてきたような特徴を持つがゆえに防いでいる。

(3) 授業計画立案に生徒を参加させている。

授業計画立案に生徒の意見を殆んど反映させていない現在の一般の授業のあり方は、生徒を意欲的に授業に参加させにくい。われわれの展開した総合学習は、当然の事ながらいわゆる教科書がない。従って教科書にとらわれた順序で授業をする必要がない。しかし自分達で授業を作っていくかねばならない。そこに生徒が参加する余地があったといえる。'88年度の反省会で生徒の一人は自分達で一学期の授業計画を作ることができて良かったと述べている。このことにより自分達の授業なのだという参加意識を持つようになっていく。

さらに一時間毎の授業展開の中でも司会を生徒にさせることにより、授業を生徒がリードしているという気持ちを持たせることができた。そして生徒でも教える立場に立っていいんだという意識を持つに至った。'88年度の実践はこのことを示している。

(4) 一人の生徒を、教師が総合的にとらえることができる。

一般の授業では、特定の教科からみた生徒像をわれわれ教師はもってしまいがちである。この弊害を総合学習は防いでくれる。そしてこのことは、教育らしい教育、即ち生き方を考えさせるという、教育の本質に迫った教育の実践を助けてくれる。一般の教育指導の下にあっては問題児であり、自からも落ちこぼれだと自嘲していた生徒の意外な面がみえ、本人も落ちこぼれでないということを実感していく。中学校3年生を対象にした1983年度の実践例ではあるが、いじめ事件のあったクラス担任から、総合学習への効用として次のような印象が述べられていることを紹介する。(注⑤の文献参照)

「(生徒が)未熟な私の説教を真剣に受けとめ、校長先生の話に大勢が涙まで流した背景には、総合学習で人間について考えてきた一成果があると評価したい。総合学習における授業は、教科の枠をとった教科指導ではあったと思うが、生徒指導という教科外の指導に担任として大いに役立てることができた。」

注① 総合学習三年間の歩み(1986~1988)
~大テーマ「生命について」~

1 第一学期の問題提起の為の小テーマ

(教師の問題提起したもの)

1. 生命観に関するもの	年度
生命の誕生(生物学の立場)	'86 '87
生命の誕生(宗教・神話の立場)	'86 '87
生命の思想史	'86
生命の誕生と成長	'86

老化について	'86		
宗教と生命観	'87		
死刑制度	'87		
2. 生命をとりまく状況に関するもの			
生命を脅かすもの(戦争と公害)	'86		
人口論と食糧問題	'86	'87	
ベト君・ドク君	'87		
異常児・障害児のいのちについて	'87		
チェルノブイリ・クライシス	'88		
核エネルギーの利用と生命	'88		
戦争と生命	'88		
3. 人間の生き方に関するもの			
心の悩み	'86	'88	
			(生徒の問題提起)
言葉について(失語症)	'86		
自殺と殺人	'86		
生命と労働	'86		
遊びについて	'86		
生命のリズム	'86		
人間の生命とは	'87		
非行と犯罪	'87		
精神病理	'87		
麻薬・シンナー・たばこ	'88		
愛と性	'88		
差別について	'88		
生きているとは	'88		
4. 生命倫理に関するもの			
遺伝子操作	'86	'87	
脳死と臓器移植	'86	'87	
バイオエシックスをめぐって	'88		
3. 人間の生き方に関するもの			
心の悩み(中・高年の心理)	'86		
心の悩み(幼児の心理)	'86		
心の悩み	'86		
心について(自分史)	'86		
殺人	'86		
自殺について	'86		
遊びについて	'86		
失語症(言葉について)	'86		
老人ホーム	'87		
人間の心『無意識』について	'87		
差別について	'88		
人間の心理(精神病医療)	'88		
ガン・その告知について	'88		
文学者にみる狂気と絶望感	'88		
青年の無気力について	'88		
刺激を求める世代	'88		
4. 生命倫理に関するもの			
代理母について	'87		
脳死の判定基準と世論	'87		
脳死と臓器移植	'87		
脳死について	'87	'88	
ピオスとエシケイ〜バイオエシックス	'88		
5. その他			
脳の男女差	'86		
台湾と日本(霧社事件)	'88		
③ 三学期の反省会で出された生徒の意見			
			(主に授業形態について)
1986年度			
○ 討論形式の授業はなかなか良かった。			
○ ほんとうは、テーマを生徒達で作り、授業計画も立てるべきだ。			
○ いちから自分達で作る授業をやって欲しい。			
○ 教師はしゃべりすぎだ。			
1987年度			
○ この授業こそ、本校らしい授業である。がんばって続けて欲しい。			
1988年度			
○ 青年の考えていることを主張する場が高校に欲しい。総合学習はそういう場だ。			
○ 生徒にもすばらしい人がいるはずだ。そういう人を先生にした授業もあって良い。			
○ 他の授業とこの総合学習の授業と相互乗入れするとよい。			
注② 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第33集(1988)P15 「総合学習——そのねらいと成果——」			
2. 第二学期の調査・研究での小テーマ			
			(生徒が選んだもの)
1. 生命観に関するもの			
生命の思想史	'86		
昔の偉い人の生命観	'87		
宗教と生命観	'87		
死刑廃止論	'87(二人)		
2. 生命をとりまく状況に関するもの			
人間の営みと自然破壊	'86		
(核エネルギーについて)			
人間の営みと自然破壊	'86		
(大気汚染、水質汚濁等)			
日本の食糧問題	'86		
胎児の障害	'87(二人)		
タバコが人間に与える害	'88		
21世紀と人類	'88		
核エネルギーと生命	'88		

注③ 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第32集 (1987) P 33 「総合学習“生命について”の授業実践のまとめと今後の課題」

注④ 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第28集 (1983) P 27 「総合学習研究四年の歩みから」

注⑤ 同上 P 39 「“ゆとり”の時間を利用した総合学習の展開——実践学年担任の立場から——」

注⑥ 1989年度に生徒と共に作り上げた第一学期の授業計画案を以下に示す。昨年に比べ、生徒による問題提起予定がさらに増えている。この増加については、研究グループに属する教師からあまり生徒の登場を多くするのは良くないという異論も出ている。

1989年度 総合学習第一学期授業予定案
(1989年4月24日作製)

小テーマと順序		問題提起者
1. 生命の誕生	(1)	教師
2. 仏教の生命観	(1)	生徒
3. 生命の営みと自然破壊	(2)	教師
4. 核エネルギーと生命	(1)	生徒
5. 差別について	(3)	生徒及び教師
6. 臓器移植と脳死	(2)	生徒及び教師
7. たばこ・シンナー・麻薬	(2)	生徒
8. 愛と性	(2)	生徒及び教師
9. 自殺(含む生き方)について	(1)	生徒

()内の数字は回数を示す。
大テーマひきつゞき「生命について」である。